

幼小連携を目指した早期外国語教育導入の取り組みに関する研究

ー北海道東川町における「Globe」教科に着目してー

XIE CONG

I. 問題の所在と研究の目的

昨今、グローバル化の推進とともに、異文化コミュニケーションが重視され、外国語教育の低年齢化の傾向が進行している。1986年に臨時教育審議会の第二次答申が発表され、英語教育の開始時期についての検討が始まった。そして、1998年告示の学習指導要領により、外国語教育が国際理解教育の一環として、全国で活発に推進されるようになってきた。小学校の外国語教育が必修化されたのは、2008年改訂の学習指導要領によってである。その際に、小学校高学年に「外国語活動」が新設されるが、その後、外国語教育の低学年への拡大が進行している。2017年改訂の学習指導要領では、「外国語活動」が小学校第3学年から始まり、また、小学校第5学年から外国語が正式な教科となった。

小学校へ外国語教育を導入することについて以前より賛否両論がある。多くの反対者は、日本語を十分に習得できていない時期に、外国語の習得が日本語に影響を及ぼし、中途半端な日本語しかできなくなってしまうと心配する。しかし、幼児・児童は外国語の授業以外、すべて日本語の世界に浸っているので、早期段階で習得する程度の外国語を導入しているからといって、日本語に乱れが生じるとは言い難い（白畑, 1997, p. 107）。むしろ、賛成者は幼児・児童の発達段階に応じた特徴を踏まえ、早期外国語教育導入の必要性について、主に以下の2点を論じている。1つ目は、脳生理学の視点からみると、4、5歳から小学校低学年までは右脳が活発で、言語習得に主要な役割を果たしている。特に、6歳までが発音習得の「臨界期」または「敏感期」という説が有力であり（伊藤, 1997, pp. 96-100）、幼稚園から音声としての外国語に慣れさせるのが大切であると考えられる。2つ目は、文化心理的枠組みの形成が9歳から15歳くらいまでであるという説があり（箕浦, 1984）、8歳頃までに異言語や異文化に対して違和感や抵抗感なく受け入れる態度を育成することが可能である。

確かに、言語獲得のさまざまな研究を総合すると、大体6歳までに言語獲得の爆発

的なピークが言われているが、思春期以降はその能力が急速に衰えてしまう。早期教育の過熱が必ずしもよい結果だけを生むとは言えないが、幼稚園から小学校にかけての環境が大切なことは確かである（酒井，2002，p. 301）。

昨今、学校教育においては異言語教育・異文化教育が強化されているが、残念ながら幼児教育に関わる実践が未だ希少である。しかし、幼稚園教育要領においては、教育内容の「環境」領域で、「異なる文化に触れる活動に親しんだりすること」「社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生え」と明記されている（文部科学省，2017a）。そこから幼児教育段階でも異文化教育や国際教育が学校教育と同様に重要であることが見られる。それで、世界各国の人々とコミュニケーションできる能力を育成するための外国語教育は、小学校第3学年以前で、実施されることが可能なのか、また、幼児教育から小学校教育へどのように円滑に接続されるのか。そのような問題を検討する価値はある。2017年改訂の学習指導要領の実施によって、小学校中学年以下は外国語教育が必修化されるようになったため、本研究で言う「早期」とは、幼稚園と小学校低学年の段階である。

本研究の調査地である北海道東川町では、世界に開かれた子育て・教育のまちづくりを目指して、幼・小・中・高で連携しながら国際教育を推進している。そのため、2018年から国際教育を中核とした新教科「グローブ（Globe）」（以下「Globe」と表記）が創立され、外国語の学習が幼稚園から行われるようになった。本研究では、国際教育を教育行政の柱にする北海道東川町の「Globe」教科を事例に、幼小連携を目指した早期外国語教育の取り組みを明らかにすることを目的とする。

II. 早期外国語教育導入の留意点

早期教育段階へ外国語を導入することが必要とされるとしても、小学校3年生からの外国語教育へ順調に接続できるために、導入の際に生じうる課題を明らかにしなければならない。前述したように、小学校における外国語教育の導入について、様々な議論がなされている。例えば、三浦ほか（2005）は、母語への影響、専門性を備えた指導者の不足、英語優越主義に陥る危険性というような懸念を抱いている。それにしても、外国語教育の低年齢化の傾向がますます進行している。学習指導要領の改訂にあたり、上原（2018）は、小学校外国語活動のよさと気になる現状を踏まえ、小学校外国語活動へいくつかの提案をしている。これまでの小学校外国語教育の現状や課題は、早期外国語教育の導入に示唆を与えると考える。

その上で、前述したように、一前（2017）は持続可能な保幼小連携の体制作りについて、4市の保幼小連携の行政の担当者にインタビュー調査を行った。その語りからどの地方自治体においても人的環境、研修や講座、カリキュラムの3点が持続可能な連携を支える要因として重視されていることが見出された。以上のことにより、本研

究では、幼小連携と小学校外国語教育の現状や課題を踏まえ、カリキュラム上の連携と制度上の連携の2方面から、早期外国語教育導入の留意点を述べる。

1. カリキュラム上の連携

外国語教育を中心に接続期のカリキュラムを開発することが希少であるが、低年齢化傾向の外国語教育において、カリキュラムの開発が重要なことである。ここでは、ねらいと学習内容からカリキュラム開発の留意点を述べる。

a) ねらいについて

2017年改訂の小学校学習指導要領では、3・4年の外国語活動と5・6年の外国語科は、どちらでもコミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成することを目標としている（文部科学省，2017b）。しかし、最初から国際理解教育の一環として小学校で導入された外国語教育は、単に言語を学習する活動・教科ではない。「外国語教育で大切なことは、文化的多様性に気づき、多文化社会の中で、異なる考えや文化をもつ地域や世界の人々と言語などを通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や能力を育成することである」（林・廣澤，2019）。また、外国語教育が世界共通語としての英語の教育を中心として行われていると同時に、「母語の役割の重要性に言及するとともに、民族的・宗教的・言語的マイノリティの権利への配慮を強く求め、グローバリゼーションが産んだアイデンティティへの覚醒を認めたいうえで、文化的多様性および平和構築のための異文化間対話」を重視すべきである（大津・鳥飼，2002，pp. 8-9）。したがって、初めて幼児・児童に外国語に触れさせる際に、「なぜ幼児・児童に外国語を教えるのか」「外国語教育を通してどんな子に育ててほしいのか」というような問題に対して答えを明確しないと、外国語教育が形骸化してしまうかもしれない。

b) 学習内容について

小学校学習指導要領においては、外国語活動の内容を「英語の特徴等」（知識及び技能）、「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすること」（思考力・判断力・表現力）、「言語活動と言語の働き」の3方面から明記している（文部科学省，2017a）。しかし、いったん幼児期から外国語学習が開始すると、初めて外国語に触れる幼児・児童は、発達段階が小学生中・高学年と異なるため、発達段階に応じた活動を設定することが重要である。例えば、幼稚園の遊びや活動と関連させること、興味・関心をもつ題材を扱うこと、話す活動より聞く活動を設定することである。また、幼児期から小学校低学年への連携と、小学校低学年から小学校中学年への連携を念頭におき、題材の選択や活動の設定を工夫する必要がある。

2. 制度上の連携

a) 教職員間や幼児・児童間の交流の確保

幼小連携の課題について、古賀（2009）は幼小の教職員間の「総合性」と「専門性」の相互理解が足りないことを指摘している。その解決法として、幼小の教職員は相互の教育観や子どもの理解のズレを解消することを目指して、相互理解を図り、また、幼児・児童の育ちの問題状況を共有することである（西山，2002）。小学校の外国語活動は学級担任とALT等のチーム・ティーチングによる授業が中心である。学級担任とALTがそれぞれの役割を果たし、協力して授業を進める（上原，2018）。早期教育へ外国語を導入するに際して、教職員の配置は、幼稚園・小学校側の制度や予算によるが、基本的に外国人と日本人数名で構成される。また、幼小連携に向けて、外国語教育を中心に、合同研修、相互参観などの教職員の連携の機会を確保することが重要であるが、幼児・児童間の交流機会も設ける必要がある。その理由として、磯島ほか（2023, p. 141）は以下のように解釈している。「幼稚園側の園児にとっては、やがて入学する場として事前に見たり、聞いたりできることで興味や関心をもって参加することが予想できる。一方、受け入れる側の小学校においては、『幼稚園や園児のために交流する』といった考え方の傾向が見られることから、小学校や児童側にとっても交流のねらいを事前に明確にして計画、実践していくことが重要である」。

b) 研修や講座の開催

早期教育段階へ外国語を導入するにあたっては、最も重要なことは、「なぜ早期外国語教育が必要なのか」や「何を教えればいいのか」や「どのように実施するのか」というようなカリキュラム開発に係る理論的な問題を、授業者としての教職員に理解させることである。そのため、早期外国語教育に係る研修や講座は、教職員にとって活動・授業づくりに役に立てるものである。

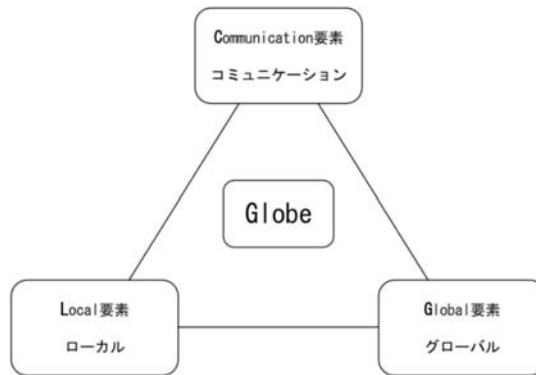
また、教職員は外国語教育の実施に際して、よりよい活動・授業を作るために、定期的に園・校内や各学年で打ち合わせを行う必要がある。

さらに、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の改訂に伴い、「幼小連携」がますます重視されるようになってきているため、幼小の教職員は、その教育方針を念頭におき、活動・授業を実施する必要がある。そこで、幼小の教職員の間で交流できる機会を設けると、接続期の外国語カリキュラムの作成が期待できる。

Ⅲ. 調査対象地の概況と調査方法

1. 東川町の国際教育について

東川町は北海道のほぼ中央に位置し、東部が日本で最大の「大雪山国立公園」の区域であり、北海道の最高峰旭岳を擁する自然豊かな町で、全国でも珍しく上水道のない町である。近年、東川町では、移住者の増加とともに、過疎化に歯止めをかけよう



第1図 「Globe」教科のねらいの構成図

(東川小学校の提供資料をもとに筆者再構成)

としている。2023年9月に至るまで、東川町在住者が約8600人、その中で、在住外国人が約400人であった。それにより、国際交流や国際教育にも積極的な取り組みをしており、子どもたちには外国人に接する機会が増えてきている。また、東川町の教育重点施策については、「ふるさとを学ぶ」「学ぶ力をつける」「世界を学ぶ」という3点があげられている¹⁾。「世界を学ぶ」という国際教育は、「Globe」教科を中心に盛んに行われている。「Globe」教科は、2018年から創立され、第1図に示したように、「ローカル」「グローバル」「コミュニケーション」の3要素で構成されており、幼・小・中・高を連携しながら実施されている。

2. 調査協力園・校の概況

東川町には、幼児センター「ももんがの家」、キトウシこどもの森キトキト、東川こまくさ保育園という3つの幼児教育機関があり、また、東川小学校、東川第一小学校、東川第二小学校、東川第三小学校という4つの公立小学校がある。その中で、規模が最も大きいのは幼児教育センターと東川小学校である²⁾。また、この二つの機関では、文部科学省の研究開発学校の指定を受け、「Globe」教科が実施されているため、本研究では、幼児センターと東川小学校での「Globe」教科の取り組みを中心に、東川町での早期外国語教育の実態を調査した。

a) 幼児センターの概況

幼児教育センターは町内の保育所（認可保育所2箇所、季節保育所2箇所）と幼稚園を統合し、2002年12月に幼保一元化と子育て支援センターの合築施設として開園した。

幼児センターでは、0歳から就学前までの6年間を通して一貫した系統的な教育保育課程を編成しているが、3歳以上児は、幼保の区分がなく、共通の教育保育課程を編成し、教育保育を行っている。また、東川小学校との幼小連携プログラムやALT（外

国語指導助手：Assistant Language Teacher）等による外国語教育が行われている³⁾。

b) 東川小学校の概況

東川小学校は町の中央部にあり、広々した小学校である。教育目標は「かしこく（知）・やさしく（徳）・たくましく（体）」であり、そのキーワードはそれぞれで「学びプラン」「心プラン」「体プラン」という3つの学習プランに対応している。また、「Globe」教科は「学びプラン」に位置付けられ、学ぶ楽しさ、評価、地域教育資源の活用等を踏まえ、充実されている⁴⁾。

c) 幼小連携の活動

幼児センターにおいては、様々な体験活動を通して将来の人間形成の基礎・土台作りを行うことで小学校入学前に学校生活に必要な力を身につけ、入学への大きな段差を、乗り越えやすくしていくことを目指し、5歳児を対象として「プレスクール事業」を実施している⁵⁾。幼小交流体験がその一環として幼児センターと東川小学校で様々な活動を通して行われている。幼児センターは東川小学校との距離が近く、幼児の9割が東川小学校に進学するため、普段日常的な交流が多い。主要な活動は、第1表に示すようである。

3. 調査の方法

本研究では、東川町公式ホームページ、調査対象者からもらった資料等を中心に、情報を収集し、文献研究を行う。また、半構造化インタビュー調査と授業観察を採用し、「Globe」の取り組みを分析する。

a) 文献研究

「研究開発実施報告書」や学習指導案の分析を通して、幼児センターと小学校低学年での「Globe」のねらい、学習内容、実施状況等を明らかにする。

b) インタビュー調査

本研究では、幼児センター教員1名(教員A)、東川小学校教員1名(教員B)、「Globe」

第1表 幼児センターでの幼小連携活動

交流時間	交流の学年	交流活動	
7月	1年生	ミニ運動会	幼児センターのグラウンドで、園児と児童が一緒にチームを作って、1時間ほどの運動会に参加する。
8月	1年生	Globe 合同授業	幼児センターの園児は東川小学校に行って、児童と一緒に「Globe」授業を受ける。
12月	5年生	共同制作活動等	園児と児童は一緒に折り紙を折ったり、コマを作ったりする活動をする。
2月	5年生	一日入学	来年度入学する幼稚園児が案内係を担当する5年生(来年度の6年生)から学校のことを紹介してもらう。

(幼児センターの提供資料とインタビュー調査のデータをもとに筆者作成)

教科のカリキュラムの作成に関係する教員1名（教員C）、東川町教育委員会行政担当者1名（職員A）を中心に半構造化インタビュー調査を実施した。

インタビュー調査の内容について、一前（2017）の持続可能な保幼小連携の体制作りについての研究を参考にし、外国語教育の導入と関連し、人的環境、研修体制、カリキュラム、効果・課題・展望という4方面から、それぞれの調査対象者に応じて、質問項目を作成した。

c) 授業観察

東川小学校1年の「Globe」授業を1時間観察した。また、授業後、担当教員への聞き取りを通して、「Globe」授業の流れや学習形態を把握した。

IV. 北海道東川町における「Globe」教科の取り組み

前述したように、北海道東川町は、2017年度から2020年度まで文部科学省の「国際教育に係る研究開発学校」事業を推進しており、2018年から新教科「Globe」を創立した。「Globe」が幼・小・中・高を連携しながら外国語教育を実施する教科であるため、そこから早期外国語教育の可能性が見られると考える。本章では、前述した早期外国語教育の留意点を踏まえ、「カリキュラム上の連携」と「制度上の連携」の視点から、「Globe」教科の取り組みを分析する。

1. カリキュラム上の連携

a) 「Globe」のねらい

職員Aの語りによると、当初「Globe」教科を創立した理由について、主に2つある。一つは、グローバル化の推進とともに、幼児・児童は外国人と接する機会が増えてきているため、外国人に対する偏見や差別を起こさせないような教育をしなければならないからである。もう一つは、学習指導要領の改訂とともに、児童に対しても、教員に対しても、小学校3年生からの外国語教育に接触する恐怖感を解消するためである。もし児童は幼稚園から外国語に慣れるなら、そのようなマイナスな気持ちが解消され、今後の外国語学習に対して積極的な態度を形成することができる。教職員にとっては、どうやって英語学習のモチベーションを引き起こすのが課題になっているが、留学生やJETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業：The Japan Exchange and Teaching Programme）のスタッフとの交流を進めている中で、文化や価値観の学習が言語学習のモチベーションと結び付くと感じている。そして、その背景には新教科「Globe」が誕生した。「Globe」のねらいは、「ふるさと東川を愛する心情を高め、人間尊重の精神を基調とする国際性を養い、国際社会に通用するコミュニケーション能力を育成する」ことで、第1図のように「ローカル要素」「グローバル要素」「コミュニケーション要素」で構成されている。具体的に、「Globe」教科は「自国や地域の文化や伝統に根ざした自己の確立を図る」こと（「ローカル」）、「多様な文化を

受容し、共生することのできる態度を育成する」こと（「グローバル」）、「英語をツールとしたコミュニケーション能力を育成する」こと（「コミュニケーション」）を目指している⁶⁾。そこからみると、「Globe」教科はただ英語を教える教科ではなく、国際社会で活躍できる人材の育成を目指した英語教育を行う教科である。初めて外国語に触れる幼児・児童にとって、ただの言語学習だと、モチベーションが上がらないため、国際教育の視点から外国語教育を行うことは一つのやり方である。

第2表は「Globe」の目標を示したものである。幼児センターと小学校低学年では、「目指す子ども像」が同じく「ローカル」「グローバル」「コミュニケーション」で構成されている。また、幼稚園では、「知識と技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力」という評価の観点を設けないため、教育内容の5つの領域と関連しながら目標を設定している。ここでは、この3要素を踏まえ、「Globe」のねらいを分析する。

「ローカル」について、幼稚園では、「自分の好きな物、嫌いな物が言える」「自分の思いを伝えることができる」という表現からみると、郷土理解より、自己理解や自己表現のほうが強調されていることが分かった。その一方で、小学校低学年では、郷土理解や自己理解のほか、自分の役割を愛郷心と関連付けていることも強調されて

第2表 「Globe」の目標（幼稚園と小学校低学年段階）

領域	内容	指導の観点	育成を目指す 資質・能力	幼児センター	小学校低学年
Local	自国の文化や伝統に根ざした自己の確立を図る。	自己理解 郷土理解	知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・英語に親しむ ・英語のゲームや歌を楽しむ ・簡単な英語の指示を聞いて行動できる ・Yes, No や簡単なあいさつの言葉を自ら発することができる 	地域の自然や文化・生活に親しむ。
			思考力・判断力・表現力等		自分の経験から思いや考えをもち、考えを表現することができる。
			学びに向かう力・人間性等		自分の役割のために努力しようとするとともに、地域に親もとうとする。
Global	多様な文化を受容し、共生することのできる態度を育成する。	多文化共生	知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな国の人々に親しみをもつ ・自分の好きな物、嫌いな物が言える ・友達と上手に関わりながら生活していける ・身のまわりの友達や自然環境に関心をもつ 	身のまわりの物の違いや、友達との個性の違いに気付く。
			思考力・判断力・表現力等		体験したことや身のまわりの事柄について疑問をもち、考えを表現することができる。
			学びに向かう力・人間性等		友達と仲良く助け合うとともに、他の国の人々や文化に興味をもつ。
Communication	文化の異なる人々との英語をツールとしたコミュニケーション能力を育成する。	コミュニケーション	知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの楽しさを友達と共感できる ・元気よくあいさつや返事ができる ・自分の思いを伝えることができる 	外国語を通して、他の国の文化や音声の違いに気付き、外国語の簡単なあいさつ等の表現に慣れ親しむ。
			思考力・判断力・表現力等		身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして、自分のことを伝え合う素地を養う。
			学びに向かう力・人間性等		外国語を通して言語やその背景にある文化に触れ、積極的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

（東川町教育委員会公式ホームページ「令和3年度研究開発実施報告書・第4年次」をもとに筆者再構成）

いる。「グローバル」について、多文化共生を中心に、外国人だけでなく、身の回りの友達との付き合いも重視されている。また、他国の人々や文化に対して、幼稚園の「親しみをもつ」から小学校低学年の「興味をもつ」へ、だんだん深まっていく。「コミュニケーション」について、幼稚園で歌やゲーム等を通して英語に親しむことや簡単な挨拶ができることや簡単な英語の指示が聞き取れることを目標とするが、小学校低学年で、それ以外に、英語と母語との違いに気付き、英語で自ら発信しようとする態度の育成が重視されるようになる。

b) 「Globe」の学習内容

教員Cの語りによると、「Globe」が新設教科のため、学習指導要領や地域の教育方針を念頭におき、ゼロからカリキュラムを開発する必要がある。早期教育段階では、年間授業時数が、幼児センターで10時間、小学校低学年で35時間しかないが、教科書がなくて独自のカリキュラムを開発しなければならない⁷⁾。第3表はGlobe年間授業計画を示したものである。教職員は単元デザインに際して、幼児・児童の発達段階に応じることだけでなく、海外の文化（グローバル）に触れることを通して、日本や東川町のこと、自分自身のこと（ローカル）を伝えられる（コミュニケーション）ようにすることを念頭におく必要がある⁸⁾。4歳児は年間の国内外の祝祭日をきっかけに歌や絵本等を通して外国語に触れるが、外国語の学習とは言えない。5歳児から、ALT主導の下、「Globe」を本格的に実施する。学習内容は、母国と他国についての認識、色、食べ物、体、動物、海外の祝祭日、自己紹介、挨拶等であり、基本的に幼児の興味のあるものや身の回りのものから始まる。また、リスニングを重視し、これから小学校での学習の基礎となる単語に親しませる。小学校では、3要素と評価の観点を踏まえ、単元デザインを工夫している。第1学年では、入学の最初に幼児センターで学んできたことを授業に取り入れる。学習内容は、季節、買い物、歌、日本の舞踊と世界のダンス等に関わるものである。第2学年では、自分の好きなもの、時間、遊び、国内外の伝統行事等に関わることを学習し、また、ALTや日本語学校留学生との交流を通して、児童に世界各国の文化への理解を深めさせる。早期外国語教育において独自のカリキュラムを開発するといえども、学習内容が小学校3年以降の外国語教育と接続することができるように、小学校学習指導要領に基づき作成される。

指導方法について、幼稚園では、絵本、歌、ダンス、ゲーム等を活用して、英語に親しませる。小学校低学年では、自分で見付けてきた自然の中での発見や身近なもの、ごっこ遊びを通して、英語でコミュニケーションの楽しさを味わう。また、筆者は、小学校1年生の授業を観察することと、授業者の教員Bへのインタビュー調査を通して、「Globe」授業の特徴として2点が分かった。①教員は授業の最初から新出表現を提示し、繰り返しの中で児童に覚えさせる。②教員は児童の学習意欲を引き起こすため、視覚的に分かるものを用意する。例えば、劇が好きな1年生のために、お店ごっ

こ用の帽子や道具を準備する。

第3表 Globe 年間授業計画 (幼児センターと小学校低学年)

月	4歳	5歳	小学校1年	小学校2年
4	<ul style="list-style-type: none"> 活動に参加し子どもたちと交流 季節の制作や遊びを一緒に行う 	<子どもの日> ・こいのぼり	Globe 1 (6時間) Hello 英語で遊ぼう! 幼稚園で学習した色、体、動物を使ってゲーム【C】	Globe 1 (4時間) I like sushi 好きなものを英語で伝えよう! 気分や好きな物を使って伝える【C】 自己紹介【L】 Globe 2 (5時間) What's this?
5		<七夕> ・七夕飾り	Globe 2 (2時間) Spring 見つけた春を英語で言ってみよう! 春の花や昆虫さがし【L】	いろいろな国のめずらしいものをしろう! JETによる母国の珍しいものの紹介【G】
6			Globe 3 (2時間) Touch your head 体を英語で言ってみよう! Head, Shoulders, Knees and Toes【C】 Globe 4 (2時間) Summer 見つけた夏を英語で言ってみよう! 夏の花や昆虫さがし【L】	Globe 3 (3時間) What time is it? ALTの国の一日の過ごし方を聞こう! 自分の一日【L】 ALTによる母国の一日の紹介【G】
7	<ul style="list-style-type: none"> 活動の中で絵本・歌・手遊び・ダンスなど クラスの子どもたちと交流 	Foods/たべもの ・色と食べものを組み合わせて学ぼう	Globe 5 (3時間) Snakes and ladders game かずやよう日の英語を使って遊ぼう! Globe 6 (5時間) Autumn 見つけた秋を英語で言ってみよう! 見つけた秋を色と大きさとあわせて英語で言ってみよう【C】	Globe 4 (7時間) Do you like pizza? 好きなものを英語で聞いてみよう! 自分の好きなもの【L】 日本語学校留学生との交流① 世界の遊びを教えてもらおう【G】 Globe 5 (3時間) Large, medium, or small? ハンバーガーショップゲームをしよう! Globe 6 (7時間) Can you play otedama? できることを英語で聞いてみよう! 自分ができること【L】
8	<お神輿担ぎ> ・お神輿作り	Body/体 ・体の部位の名前を英語で聞こう	Globe 7 (3時間) 5 apples please くだものやさんごっこをしよう! 【C】 Globe 8 (5時間) Winter 冬を楽しもう! 外で冬の遊び【L】 雪だるまの比較【L/G】	Globe 7 (2時間) Merry Christmas!&Happy New Year! クリスマスやお正月の過ごし方をしろう! 日本の伝統行事【L】 世界の伝統行事【G】
9		Animals/動物 ・動物の名前知ろう ・他の国の鳴き声を聞いてみよう。	Globe 9 (3時間) Twinkle Twinkle Little Star 世界のこともっとしろう! JETの母国語であいさつ【G】	
10	<ul style="list-style-type: none"> 活動の中で絵本・歌・手遊び・ダンスなど クラスの子どもたちと交流 絵本などの他にクイズで言葉にふれる 	ハロウィーン紹介		
11		Halloween/ハロウィーン pumpkin, vampire, mummy, ghost, ゆっくり・はやく・とまって! Walk, Run, Slowly, Fast, Stop, Jump, Sit, Stand up...		
12	<ul style="list-style-type: none"> クラスの子どもたちと交流 絵本などの他にクイズで言葉にふれる 	クリスマス紹介		
1	<ul style="list-style-type: none"> It's a quiz! (What's this?) ※歌や絵本の中でふれたことのある単語など 	Numbers/数字(1-10) ・one to ten ・形を知ろう		
2	<節分>	Self-introduction/ 自己紹介 Hello/My name is.../Nice to meet you/Thank you See you	Globe スペシャル (4時間) 踊ってみよう!日本の踊り 世界のダンス【L】 盆踊りや日本舞踊【L】 世界のダンス【G】 ラトビア・タイ	Globe 8 (1時間) Let's be good 3年生! 3年生に向けての目当てをもとう! Globe スペシャル (3時間) やってみよう! 日本の遊び 世界の遊び (年間) 日本の遊び【L】 体を使った遊び 世界の遊び【G】 インドネシア・ロシア
3/通年	<ひなまつり>	外国っておもしろい Hello/Nice to meet you How are you?I'm good, happy, sad, sleepy, hungry, hot, cold Thank you/See you ・様々な人、言葉、文化があることを知り興味や関心を持つ ・様々なあいさつや握手、ハグなどのあいさつにもふれる		

(東川町教育委員会公式ホームページ「令和3年度研究開発実施報告書・第4年次」をもとに筆者再構成)

2. 制度上の連携

a) 「Globe」の指導体制と幼小の合同「Globe」授業

「Globe」の指導教員の配置については、教員Aと教員Bの語りによると、幼稚園で担任と2人のALTで、小学校で学級担任、特別支援学級担任、ALT、JTE（日本人英語指導者：Japanese Teacher of English）になっている。また、教員がそれぞれの役割を果たしている。学級担任はクラスの児童のことが最も分かるため、授業の司会を担当する。JTEは「Globe」の主担当で、プランを立てたり学習指導案を作成したりする。ALTは世界と関わる窓口として、ネイティブの外国語を子どもに教える。また、ALTは同時に幼児センターと東川小学校で授業をするため、幼児・児童の問題状況をよく把握しており、幼小連携において役割を果たすことができる。

前述したように、幼児センターと東川小学校では、普段多くの交流活動が行われている。その中で、年長組と小学校1年の合同「Globe」授業が注目される必要がある。授業のねらいは、幼児と児童の双方、幼児、児童という3つの立場から作成されている。①幼児と児童にとっては、「Globe」を通してコミュニケーションを図り、楽しく交流できる。②幼児にとっては、児童とふれあうことで、関わりを広げ、小学校生活に親しみをもつことができる。③児童にとっては、幼児と関わることで、思いやりの心を育む⁹⁾。教員Aによると、学習内容は、挨拶と遊びを中心に、基本的にすでに幼児センターで学んできたものである。また、合同授業では、新しいものを学ぶことより幼児・児童の交流のほうが重視されている。そのため、助け合ったり、教え合ったりする場面がよく見られる。

b) 「Globe」に関わる教員研修

「Globe」に関わる教員研修は研究推進委員会、職員研修会、日常の授業研究に大別することができる。

研究推進委員会は「Globe」カリキュラムの開発、授業実践の中心となるメンバーで構成されている。会議では、各校の進捗状況や授業実践上の課題等を話し合ったりして、共通理解に努めたりして、カリキュラム開発に尽力してきている。職員研修会は、国際教育への意識を高め、多様な価値観を受け入れるための教員向けの研修会であり、主に夏休みと冬休みで実施されている。研修は町内の研究にとどまらず、国内外の学校とも交流している。また、教員の転勤により、「Globe」をどのように継続するのかが課題になっている。そのため、定期的に新入教員に向けて「Globe」とは何かを説明する必要がある。例えば、今年は4月と夏休みに「Globe」に関する説明会が開催された。授業研究について、小学校では、各学年で「Globe」打ち合わせを定期的に行い、学級担任、特別支援担当教諭、ALT、JTE全員で各自の役割を果たして教材づくりや指導方法等について検討し、授業づくりを進めている¹⁰⁾。

3. 成果と課題

幼児センターでは、幼児は、ALT から学んできた単語や挨拶を日常生活の中で自然に使うことができている。また、ALT の発音を耳で聞き慣れ、自分で真似しながら発音するので、ネイティブの発音を身につけてきており、小学校の先生から、幼児センターから「Globe」を経験してきた児童の発音を褒めてもらったことがある。さらに、そのような児童は、幼児センターでの「Globe」の経験を活かして、抵抗感なくスムーズに小学校の「Globe」の学習とつながることができている¹¹⁾。

「Globe」の課題について、教員 A は「課題が特になく、今のままで続いている」というため、幼児センターは「Globe」の実施に満足度が高いと考えられる。その一方、小学校低学年では、教員 B によると、教科書がなく、独自のカリキュラムを開発する必要があるため、ゼロから授業をつくるが大変なことだという。そこから、教員にとって、新教科の授業づくりが課題となっていることが分かった。

V. まとめと今後の課題

本研究では、北海道東川町の新教科「Globe」を事例に、カリキュラム上と制度上から、幼小連携を目指した早期外国語教育の取り組みを明らかにしてきた。東川町の「Globe」の取り組みが今後早期外国語教育への示唆について、以下の四点が挙げられる。第一に、早期外国語教育は単に第二言語を習得することではなく、異なる文化や価値観に対する理解と自国や地域に根ざした自己の確立が重視されるべきである。第二に、早期外国語教育は幼児・児童の発達段階に応じて行われる必要とされる。学習内容は幼児・児童の興味のあるものや親しみやすいものから始まり、「聞く」ことと「話す」ことを中心に、歌やゲームなどの感覚運動的な要素を授業に取り入れる。また、指導の際に、幼児・児童に ALT の発音を真似させ、繰り返しの中で、新出表現を覚えさせる。第三に、小学校 3 年以降の外国語教育と接続することができるように、早期教育段階では、幼小連携と小学校低中学年の接続を念頭におきながらカリキュラム開発や授業づくりを工夫する必要がある。第四に、早期外国語教育には教員の確保が重要である。それは、定期的な研修だけでなく、教員間の連携が必要とされる。特に、授業づくりは、JTE 一人の力に限界があるため、学級担任や ALT のそれぞれの役割を果たすことが大切である。

最後に、本研究に残された課題を述べる。本研究では、収集した資料とインタビュー調査のデータを中心に「Globe」の取り組みを分析してきたが、授業観察の時間が足りなく、授業の様子を全面的に把握することができない。また、教員が強調している「Globe」の授業づくりは、具体的にどのように進められてきているのかが明白になっていない。以上を明らかにすることを、今後の課題としたい。

謝辞

本研究をまとめるにあたり、東川町教育委員会の職員の方々、東川町内の保育園・幼稚園・小学校の先生方には、大変お世話になりました。特にインタビューに答えてくださった先生方からは、多大なるご協力を賜りました。また、東川町教育委員会、幼児センター、東川小学校からは貴重な資料をいただきました。深く御礼申し上げます。

注

- 1) 東川町教育委員会の提供資料とインタビュー調査のデータより
- 2) 東川町公式ホームページ. <https://higashikawa-town.jp/portal/manabu>(最終閲覧日：2023年12月29日)より
- 3) 幼児センターの提供資料「東川幼児センターももんがの家 要覧」より
- 4) 東川小学校の提供資料「令和5年度学校要覧」より
- 5) 前掲3)
- 6) 東川町教育委員会公式ホームページ「令和3年度研究開発実施報告書・第4年次」
<http://higashikawa-edu.jp/> (最終閲覧日：2023年12月29日) とインタビュー調査のデータより
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 幼児センターの提供資料「幼小連携 交流学习 (合同 Globe) について」より
- 10) 前掲6)
- 11) 同上

文献

- 磯島年成・西出勉・大室道夫 (2023) : 幼小連携の在り方についての一考察. 北翔大学教育文化学部研究紀要, 8, pp. 131-143.
- 一前春子 (2017) : 『保幼小連携体制の形成過程』, 風間書房.
- 伊藤克敏 (1997) : 第3部 公立小学校の外国語教育 第1章 小学校における外国語教育の意義と役割 1. 脳生理学と発達心理学の視点から. 樋口忠彦編著『小学校からの外国語教育』, 研究社出版, pp. 94-101.
- 上原周子 (2018) : 小学校外国語教育の意義とありかた—小学校外国語活動の教科化に向けて—. 教職実践研究, 8, pp. 27-34.
- 大津由紀雄・鳥飼玖美子 (2002) : 『小学校でなぜ英語—学校英語教育を考える—』, 岩波書店.

- 古賀倫嗣(2009) :幼・保・小連携の現状と課題. 日本生活体験学習学会誌, **9**, pp. 31-39.
- 酒井邦嘉(2002) : 『言語の脳科学』, 中公新書.
- 白畑知彦(1997) : 第3部公立小学校の外国語教育 第1章小学校における外国語教育の意義と役割 2. 言語習得理論の視点から. 樋口忠彦編著『小学校からの外国語教育』, 研究社出版, pp. 102-111.
- 西山薫(2002) : 「幼保小の連携」の方向性と今日的課題:連携の諸相と問題点を中心に. 清泉女学院短期大学研究紀要, **21**, pp. 105-119
- 林敏博・廣澤義晴(2019) : 国際理解教育の視点からつくる小学校外国語教育. 椋山女学園大学教育学部紀要, **12**, pp. 271-280.
- 三浦省五・松浦伸和・深澤清治・林俊雄・磯部年晃・内藤博愛・赤松猛・伊賀泰恵・井長洋・大隈教臣・五井千穂・壇泉・笹原豊造・原田良三・久山慎也(2005) : 小学校英語教育の現状と課題. 広島大学学部附属学校共同研究機構研究紀要, **33**, pp. 167-176.
- 箕浦康子(1984) : 『子供の異文化体験』, 思索社.
- 文部科学省(2017a) : 『幼稚園教育要領』.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/04/24/1384661_3_2.pdf(最終閲覧日:2023年12月29日)
- 文部科学省(2017b) : 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』.
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_011.pdf(最終閲覧日:2023年12月29日)